



第 8 回

大家族

ルネ・マグリット

キャンヴァス、油彩 100×81cm 1963年
宇都宮美術館蔵

©ADAGP, Paris & JASPAR, Tokyo, 2015 E1933

※「美術2・3上」P9に掲載

幻視する我ら大家族

ルネ・マグリットの作品に触れたのは、高校生の時。マグリットやエルンスト、ポール・デルヴォーにベルメール、マン・レイなどシュルレアリストたちの画集が立て続けに刊行され、大いに刺激を受けた。それまでは、クレー、ピカソ、ルソーなどが好きで、美術の授業でもセザンヌやゴッホなどが語られることが多かった。けれど印象派からキュビズムへという流れのなかにあった画家たちが取り上げられることはあっても、バルテュスやゾンネンシュターンを知ることはできないでいた。それらを知るきっかけは美術によってではなく、現代詩や異端文学の世界からだったかもしれない。

そうして蓋が開いた。

美術や写真、映画、文学が好きな仲間たちが集まると、宮沢賢治やルイス・キャロルなどと共に、ダリやマグリットにも熱中したのだった。音楽も興味を中心にあって、ロックやジャズ、映画音楽に歌謡曲など、それらはシュルレアリスム作品と呼

びしあい、ジャンルを分けて語ることなどできずに少年たちの心と身体をくすぐっていた。

高校卒業後、地方都市から上京しシュルレアリストたちの作品に触れる機会も増え、マグリットの作品も何度も観てきた。

2015年の今年、東京の国立新美術館と京都市美術館でマグリット展が久しぶりに開催されたが、大勢の入場者のなかにおいて、その人気の高さをあらためて知った。

人気の高さは、童話の世界にいるような自由なイメージを観る者同士で共有でき、一方で観る人それぞれに独自の物語性を与えてくれるからなのかもしれない。

その展示数の多さにも圧倒されたが、一番印象に残ったのは「速度」だ。

マグリットの作品は、印刷されたものを見ると、一見、ダリなどと同じように緻密に描かれている印象がある。だが、実際の作品を前にして筆の運びを辿ると、意外なほど荒く

もある。それはきっと、イメージを逃すまいと決して遅くはない速度で筆を運んでいるからなのではないか？と想像する。とはいえ、情熱に任せて画布に絵の具を塗りつけるわけでは、もちろんない。

「どこに家族がいるのだろうか？」と、作品を前にした瞬間から観る者の価値観を問われるような「大家族」の、鳩と思しき鳥のモチーフは「透視」にも登場するが、その輪郭のなかには青空と白い雲があり、それを囲む海は穏やかそうで、雲の上部は暗く、けれど水平線のあたりからは、これから朝陽が差しできそうな気配もある。だからといって希望が描かれているわけではなさそうだ。

主客を転倒させる構図やモチーフはマグリットに限ったことではないが、観る者の眼差しへの問いかけが止むことはない。

作品を説明するのは野暮なことかもしれない。だがきっと、このように何事かを語りかけたくなるのがマグリットの魅力なのだろう。

佐野史郎
さの・しろう

俳優。1955年島根県松江市出身。75年に劇団「シェイクスピア・シアター」に創設メンバーとして参加。80年、唐十郎主宰の「状況劇場」に移り、84年まで在籍。86年に林海象監督の映画『夢みるように眠りたい』で主演デビュー。92年、テレビドラマ『ずっとあなたが好きだった』の冬彦役で一躍注目を浴びる。TVドラマ、映画、舞台等で幅広く活躍中。小泉八雲の朗読をライフワークとしている。